

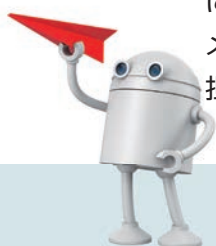
全日本学生室内飛行ロボットコンテスト（飛行ロボコン）は、学生を対象とした航空機型ロボットによる競技大会で、航空宇宙工学の知識を深め、プロジェクト遂行能力やチームワークを学ぶことを目的として、毎年開催されている。

第13回大会（2017年度）は、全国の大学・高専・高校・専門学校から50を超えるチームがエントリー。それぞれ独自の機体を設計・製作し、自作の飛行ロボットを飛ばして、被災地への緊急物資輸送を想定したミッションの遂行やタイムトライアルなどで技を競い合った。日本航空宇宙学会賞を受賞した秋田工業高等専門学校の齊藤翔梧さんは、出場意義を次のように語る。



新日鉄住金による 若手エンジニア 育成支援

全日本学生室内飛行ロボットコンテスト（主催／（一社）日本航空宇宙学会、大会委員長／土屋武司東京大学教授）に新日鉄住金は協賛し、大会出場経験のある社員を運営メンバーとして派遣するなど、次代のものづくり日本を担う若者たちのチャレンジを応援している。



大会フォトドキュメント



機体の特長や製作者としてのこだわりをアピールする出場者



飛行会場で機体を組み立て入念に最終調整



重量など機体が大会規定範囲かどうかを審査

若者たちのチャレンジを応援 飛行ロボコンに協賛



「段取りを考え、それに基づいて行動することは、ものづくりにおける効率化を図る上で最も重要なことだと学びました。また大会中に発生したトラブルに迅速に対応するためには、メンバー間の意思疎通や情報共有などのコミュニケーションが最重要であると再確認しました。先輩から受け継いできた技術に、自分たちが育てた技術や知識、行動理念などを融合させ、今後の活動に活かしていきたいと考えています」

新日鉄住金は、製鉄所の設備保全技術としてロボットの活用を進めるとともに、航空機の機体に使われているチタン素材を供給するメーカーでもあることから、飛行ロボコンに第10回大会(2014年度)から協賛している。白熱した戦いが繰り広げられるなか、第13回大会では、自動操縦部門準優勝チームに新日鉄住金賞を授与し、久留米工業高等学校が輝いた。学生たちの取り組みを見守ってきた教員の田中大さんは次のように語る。

「久しぶりの入賞を果たせ、非常に喜んでます。学生たちは飛行ロボットのコンセプト設計や機体製作を通して、装置の設計・製作・改良の一連の流れを経験し、技術者の卵として、実際にものをつくり込んでいくことを学んでいきました。OBには航空関係の仕事に就いている者も多く、これからも日本の産業発展に寄与できる人材を一人でも多く輩出していききたいと考えています」

新日鉄住金にも飛行ロボコンで学んだ経験を活かし、製鉄所や研究開発などの現場で活躍している技術者たちが在籍している。飛行ロボコンへの協賛などを通して、これからも次代のものづくり日本を担う人材の育成とロボット技術の発展に貢献していく。



第13回大会(2017年度)新日鉄住金賞を受賞した久留米工業高等学校チームと。前列中央は新日鉄住金常務取締役 谷本進治



いざ出陣。飛べ！ロボット



予選終了後、出場者は国際シンポジウム形式に準じた英語によるポスターセッションで成果発表

大会運営に参画しています！



新日鉄住金(株)
八幡製鉄所 設備部 機械技術室
倉田 駿
第4～7回大会(2008～11年度)
出場

運営側として、高度な制御技術を要求される自動操縦ミッションを提案していますが、近年は見事にクリアするチームも増えていきます。しかし最高難易度の自動着陸を成功させたチームはまだおらず、どこまで進化するのであると楽しみにしています。私も苦労して製作したロボットが目の前で飛んだときの感動や、ミッションに向けて皆で努力した思い出が、現在の仕事においても糧となっています。

製鉄所では高所点検にドローンを活用し始めています。AIやIoTとの連携で活用範囲は広がっていきます。これからも、ものづくりの現場を進化させていきたいと考えています。



新日鉄住金(株)
設備・保全技術センター
機械技術部 機械エンジニアリング室
宮川 泰
第5回大会(2009年度)出場

飛行ロボコン、ぜひ見に来てください。新入社員研修中に大会出場経験者たちと再会し、「新日鉄住金も参画しよう」という声があがったことをきっかけに、社内各部署の協力もあって協賛が始まりました。会場では機体の状態をはじめチームの良いところを発揮できるようにサポートを心がけています。

製鉄所の設備や環境は特殊なため、作業ロボットを自らカスタマイズしてつくることも多く、現場で使ってもらっ嬉しさや難しさを新たに味わっています。これからも現場に貢献し、使ってもらえるロボット装置の導入や開発に取り組んでいきます。